ハーッジー・エブラーヒームと1791年政変

Ḥājji Ebrāhīm and the coup d'état of 1791

近藤 信彰^{*}
KONDO Nobuaki

ABSTRACT The coup d'état of 1791 is one of the well-known episodes in Iranian History. Ḥājji Ebrāhīm, the mayor (kalāntar) of Shiraz, revolted against the Zand ruler, Lotf 'Alī Khān, and took Shiraz, the capital, away from him. After ten months, Ḥājji Ebrāhīm handed over Shiraz to Āqā Moḥammad Khān Qājār, and contributed to his triumph over the Zands.

However, why Ḥājji Ebrāhīm could carry out the coup d'état? He was only the mayor, which was not a military office. And why could he repulse the attacks of the Zand army during ten months? Little is known about these questions. The purposes of this paper are to investigate his origin, his career, and the process of the coup, and to reconsider its character on the basis of contemporary sources. Main arguments are following:

1. The ancestors of Ḥājji Ebrāhīm were merchants and probably converts from Judaism. Though he was not a man of noble origins, nor a Sayyed, he was appointed to the kalāntar because of his skills in administration.

2. His brothers were commander of musketeers corps of Shiraz after the death of Karīm Khān and took part in some military expeditions. Ḥājji Ebrāhīm and his brother intervened in conflicts for the successions of the Zands with musketeers corps, and assumed great prominence in the Zand government.

3. While the coup d'état of 1791 was also carried out with musketeers corps, Ḥājji Ebrāhīm was allied with other notables of other districts in Fars, and they planned to form a 'federative government' and refused to submit to any sovereign at first, though they were forced to accept the rule of the Qajars at last.

* 東京都立大学人文学部助手

Research Associate, Faculty of Social Sciences and Humanities, Tokyo Metropolitan University

4. It is concluded that Ḥājji Ebrāhim had same characteristics as the other local powers in Iran, though his rule over Shiraz was over after the nine months. And the success of the coup shows the fact that local powers grew strong enough to upset the dynasty.

はじめに

1791年8月25日未明、ザンド朝支配下の首都シーラーズで政変が勃発した。kalāntar（市政長官）であったハーッジー・エブラーヒーム Ḥājji Moḥammad Ebrāhim Shirāzī の一党が蜂起し、城塞の守備長官をとらえ、市内を制圧したのである。度重なるザンド軍の攻撃に耐え、ハーッジー・エブラーヒームはシーラーズをアーガー・モハンマド・ハーン・ガージャールに引き渡し、この結果、ザンド、ガージャール両勢力の覇権争いの帰趨は一気にガージャール側に傾いた。3年後にザンド朝は滅亡し、イランはガージャール朝によって統一され、ハーッジー・エブラーヒームはガージャール朝最初の宰相に任じられた。

イラン政治史上で有名かつ重要なこの事件であるが、その社会的背景を考えると、次のような疑問がわいてくる。ハーッジー・エブラーヒームが保持していたキャラクターは、サファヴィー朝期以降のイランの都市におかれた都市行政官であり、都市の行政のあらゆる分野に関与し、主に在地の都市有力者が任命されたとされる。⁽¹⁾しかし、あくまで行政官にすぎず、未だ研究蓄積は十分ではないものの、ハーッジー・エブラーヒームのような軍事的行動によって政治に介入する例はあまり知られていない。18世紀のシーラーズの場合、ハーッジー・エブラーヒームの前任の2人のキャラクターの活動については史料 *Kalāntar* により詳細な情報を得ることができるが、彼らにしても多くの戦乱に巻き込まれたにもかかわらず軍事面での活躍は見られない。そもそも、イラン史全般に視野を拡げればティムール朝のヘラート陥落やサファヴィー朝のエスファハーンの陥落の例では、王朝の交代に際して在地の有力者が軍事面で関与する余地がなかったことがわかる。⁽²⁾それでは、ハーッジー・エブラーヒームにはなぜこのような行動が可能であったのだろうか。

その知名度にもかかわらず、意外なことに、彼に関する同時代史料に基づいた本格的な研究は少ない。⁽³⁾そこで、本稿では、この疑問を解決すべく、ハーッジー・エブラーヒームの出自や経歴、政変の過程やその動機を分析し、その歴

史的性格を明らかにすることを目的とする。主な史料とその略号は論末に一括して掲載した。彼とその家系についてもっとも詳細な情報を提供しているのは、ファールス地方の有名な地方史 *FN* であるが、内容が箇所によって矛盾しており、また彼の子孫が隆盛を極めた19世紀末の成立であることから、同時代のザンド朝の年代記史料 *GM*, *GG*, *TZ* やガージャール朝の年代記史料 *TM*, *ZQ*, 成立年代の早い同地方の地方史 *AJ* 等の史料と十分に比較検討する必要がある。

I. ハーッジー・エブラーヒームの出自

ハーッジー・エブラーヒームの先祖に関するこれまでの説をまとめれば、およそ以下の三要素になるであろう。(1)ハーッジー・エブラーヒームの先祖がユダヤ教からの改宗者であったこと、(2)彼の先祖がインジュール政権のヴァズィールであった Ḥājī Qavām al-Dīn Ḥasan Shirāzī (d.754/1353) であったとされていたが、ほとんど信憑性がないこと、(3)彼の先祖が商人であったこと、である。実際に史料にあたってこれを確認してみよう。

管見の限り、彼とユダヤ教との関連を示す最も古い史料は、ザンド朝の年代記 *GG* の補遺である。ここでハーッジー・エブラーヒームは「母方はジブシー女、父方はユダヤ教徒 (lūlī ḥasab yahūdī nasabī)」で、「もともとユダヤ教徒で、新改宗者 (yahūdī al-aṣl jadīd al-eslām)」, さらに「ユダヤ教徒のハーッジー (Ḥājī-e yahūdī)」(*GG* 339) などと呼ばれている。もちろん、史料の著者には彼を貶める意図があったことは間違いないが、19世紀末の複数の史料も彼がユダヤ教徒からの改宗者の子孫であるとしており (*ST* 18, *TJT* 271), この説が当時も有力であったことがわかる。

一方、彼の先祖がインジュール政権のヴァズィールであったハーッジー・ガヴァーモッ・ディーンであったとする説は、19世紀末の史料 *FN* にあらわれる。ここでは、ユダヤ系の系譜については、全く触れられていない (*FN* 679, 960)。しかし、同時代人にはこの説について否定的なものも少なくない⁽⁴⁾。19世紀半ばの史料 *HA* によれば、ハーッジー・エブラーヒームの次男 Ḥājī Asadollāh Khān が自著のなかでこの系譜を主張したという⁽⁵⁾。*HA* の著者もこの系譜を一応認めており、その理由として1829年にファトフ・アリー・シャーがハーッジー・エブラーヒームの四男 Ḥājī Mirzā ‘Alī Akbar に Qavām al-Molk という

称号 (laqab) を与えたことを挙げている (HA 309)。一族の隆盛と Qavām al-Molk という称号の下賜により、この系譜の主張がより広く認められることになったと考えられる。

この二つの相反する説に関して、最も合理的な説明は、この家系がガズヴィーンの新改宗者の子孫であり、彼らがシーラーズに移り住んだのち、ハーッジャー・ガヴァーモッ・ディーン・ハサンの子孫と婚姻関係を結び、次第に彼の子孫であると名乗るようになったというものである。⁽⁶⁾ ユダヤ系の出自を隠蔽するために、ハーッジャー・ガヴァーモッ・ディーンが持ち出されたと考えられるのであるが、それでは彼はいかなる人物であつただろうか。不思議なことに、彼の事績は19世紀の文献にはほとんど記されていない。⁽⁷⁾ そのかわりに、以下のような詩人ハーフェズのガザルの対句が引用されるのである。

青海原のような大空と小舟たる新月は

(daryā-ye afzar falak va keshti-e helāl

われらのハーッジャー・ガヴァームの恩恵に浸る⁽⁸⁾

hastand gharaq-e ne‘mat-e ḥājji qavām-e mā)

もちろん、ハーッジャー・ガヴァーモッ・ディーンは文学史においてはハーフェズの保護者であつたことで有名であるが、史料の記述は、あたかも重要なのはハーフェズの詩のなかに登場するという一点であるかのようである。血統が重視される歴史的なイラン社会において、サイイドやアンサールといった系譜を主張できない彼の一族は、ハーフェズの詩に家系の権威付けを求めたのであろうか。⁽⁹⁾

一方、商業との関わりについては、彼らの先祖がペルシア湾交易に従事していたという伝承が、今世紀半ばに彼の末裔に聞き取り調査をおこなった F. Barth⁽¹⁰⁾ により伝えられている。史料 FN では、彼の祖父とされる Ḥājji Maḥmūd が “tājer” (商人) と呼ばれており、商売で得た財産でシーラーズ市の Bālā keft 街区に Hāshemiyye という名のモスクとマドラサを建設し、いくつかの耕地と小バーザールをワクフとして寄進したという (FN 679, 960, 1218, 1223)。建設者については異説があり、またハーッジャー・マフムードとハーッジャー・エブラーヒームの関係やモスクとマドラサの建設年代についても諸説ある。⁽¹¹⁾ 遅くともサファヴィー朝末期までには、イスラームに改宗した商人であつた彼の先祖がシーラーズに住んでいたと考えられる。

また、ハーッジー・エブラーヒームの父 Hājji Hāshem も、同時代史料では *semsār* (仲買人) とされており、やはり商業との関わりが認められる (*Kalāntar* 48)。彼は、一族で初めて官職を得た人物であり、遅くともナーデル・シャー期には、シーラーズ市の東側半分 (= Heydari-khāne 5 街区)⁽¹²⁾ を統括する任にあたっていたと考えられる⁽¹³⁾。1160/1747年、税を横領したファールス総督 Qiyā Qolī Āqā の逃亡を幫助した疑いで、ファールスの名士が処罰されるが、その際に片目を盲刑に処された⁽¹⁴⁾。そして、1165/1751-2年、ナーデル・シャー死後の政治的混乱のなかで時のファールス支配者 Hāshem Khān Bayāt によって殺害された⁽¹⁵⁾。ハーッジー・ハーシェムの代になって、単なる商人から地方政治にも参画する地方名士の列に加わったのである。

以上の検討により、ハーッジー・エブラーヒームの出自について事実関係を確認することができた。ユダヤ系の出自に見られるように必ずしも名家の出身とはいえないが、それでも彼の父の代までには地方名士に仲間入りしていたのである。とはいえ、当時のシーラーズには、たとえば由緒正しいサイエドの出身でキャラントル職とシーラーズ最大の聖所シャー・チェラグ廟のワクフ管財人職を務めた Sharifi Ḥasanī 家のような、ハーッジー・ハーシェムをはるかに上回る有力者が存在したのもまた事実である⁽¹⁶⁾。それでは、ハーッジー・エブラーヒームはいかにして、1791年の政変を成功させるほどの人物になったのだろうか。

II. ハーッジー・エブラーヒームとザンド朝

ハーッジー・エブラーヒームの初期の経歴についても史料による齟齬が多いが、GG によれば、ザンド朝キャリーム・ハーン期にシーラーズのヘイダリー・ハーネの一街区の官吏 (pākār) から身をおこし、キャリーム・ハーンの死後、シーラーズのヘイダリー・ハーネの諸街区を統括するようになったという⁽¹⁷⁾。すでに知られているように、1196/1782年、‘Alī Morād Khān がザンド朝の君主となって首都をシーラーズからエスファハーンに移した際、ハーッジー・エブラーヒームも当時キャラントルであった Mīrzā Moḥammad とともにこれに同行し、エスファハーンで mostowfi (財務官) として仕えた (TZ 45, GG 339)。1199/1785年、アリー・モラード・ハーンが没し、Ja‘far Khān が即位して根拠地を再びシーラーズに移す際に、ミールザー・モハンマドがそのままエスファ

ハーンに留まったため、シーラーズに帰還したハーッジー・エブラーヒームが、キャラントルに任命されたのである（TZ 55）。興味深いのは、以下のような史料の記述である。

前述のハーッジーは、征服王（キャリーム・ハーン・ザンド）の時代、前述のミールザー・モハンマド（・キャラントル）の書記の一人であり、ファールス地方の行政の諸事に通じていたので、亡き陛下（ジャアファル・ハーン）は彼にキャラントルの重職、すなわち天国の礎であるこのくにの市政長官の誉れある官職、人々すべての重要事の差配を、その家（khāne）がキャラントル職に値しない、悪しき信仰を持つ怪物にゆだねてしまわれた（GG 342）。

ハーッジー・エブラーヒームの行政手腕を敵対するザンド朝側の史料ですら認めていること、非難の中心は彼の家系にあることである。前者に関しては、街区吏から税務・財務畑を歩んできた彼が、十分な経験と能力を持っていたことは想像に難くない。後者に関しては、先述のように先祖が改宗者であったということを示していると考えられ、サファヴィー朝期以降、キャラントル職を占めてきた旧キャラントル家、シャリーフィー・ハサニー家が由緒正しいサイエドの家系であったことを考えれば当然と言える。

ところが、ハーッジー・エブラーヒームはそれ以前のキャラントルと決定的に異なる点があった。それは、シーラーズの銃兵部隊との関わりである。

ザンド朝史料 GM にはキャリーム・ハーンの没後の戦乱のなかで活躍する‘Abd al-Raḥīm Khān という軍人が登場するが、彼はハーッジー・エブラーヒームの兄にあたる。彼はシーラーズの銃兵部隊（tofangchiyān-e Shirāz）の指揮官（sarkarde）であり、1193/1779年にはアリー・モラード・ハーン・ザンドの北方遠征に同行し、1195/1781年、アリー・モラード・ハーンがサーデグ・ハーン・ザンドの拠るシーラーズを包囲した際には、シーラーズ側の陣中にいた（GM 476, 592）。史料 TZ は彼を弟ハーッジー・エブラーヒーム同様ファールスの有力アミールの中に数えている（TZ 50）。

即位直後のジャアファル・ハーン・ザンドの危機を救ったのは、このシーラーズの銃兵隊であった。ガージャール軍の南下により、エスファハーンからシーラーズへ遷都しようとしたジャアファル・ハーンであるが、ファールス総督であった Şeyd ‘Alī Khān Zand は彼と敵対しており、迎撃のために軍を派遣し

た。この陣中にあったファールスの部隊はジャアファル・ハーンを支持していたため、途中で軍を離脱、ハーッジー・エブラーヒームの弟 Moḥammad Ḥoseyn Khān が率いるシーラーズ部隊はそのままジャアファル・ハーンの軍に合流した。これにより、ジャアファル・ハーンはセイド・モラード・ハーンに対して優位に立ち、彼を服従させることに成功し、無事シーラーズに入城することができた (TZ 52-53)。アブドッ・ラヒーム・ハーンとモハンマド・ホセイン・ハーンはジャアファル・ハーン期にも、軍人として活躍したことが史料で確認できる (GM 734-735, 739; TZ 61)。そもそもこの2人が「ハーン」という称号を持っていること自体、軍人として扱われていたことの証左である。

さらに、1203/1789年の Loṭf ‘Alī Khān Zand の即位にも、この兄弟は大きな貢献をした。ジャアファル・ハーンを暗殺して君主の座についたセイド・モラード・ハーンは、湾岸方面にいたロトフ・アリー・ハーンに対して討伐軍を派遣したが、ハーッジー・エブラーヒームらシーラーズの名士と通じていた数名の軍人がロトフ・アリー・ハーン側に寝返り、討伐軍の指揮官を捕らえて、ロトフ・アリー・ハーンに引き渡した。シーラーズではハーッジー・エブラーヒームの兄弟らが峰起し、セイド・モラード・ハーンを城塞に押し込め、ロトフ・アリー・ハーンを君主として迎え入れた (TZ 70-71)。さらに、セイド・モラード・ハーンの実力者であったカーゼルーンの有力者 Ḥājji ‘Alī Qolī Khān Kāzerūnī に対して、ハーッジー・エブラーヒームは他のファールスの名士全員と説得に赴き、彼を帰順させることに成功した (MT 353)。これらの功績により、ハーッジー・エブラーヒームは、ロトフ・アリー・ハーンから「父 (pedar)」と呼ばれ、宰相の Mirzā Moḥammad Ḥoseyn がメッカ巡礼に出発するに至って、ザンド朝一の実力者にのし上がったのである。彼の兄弟・親族もそれぞれ要職についた (GG 342-343; MT 353)。

以上のことから、ハーッジー・エブラーヒームは、ザンド朝末期の王位継承争いに、自らの兄弟の率いるシーラーズの銃兵部隊を効果的に利用して介入し、ザンド朝政権内でその立場を高め、これまでのキャランタルをはるかに上回る権力を手中にしたことが明らかとなった。シーラーズ住民から編成されたと考えられるこの銃兵部隊は、1791年の政変後で兵数が2,000から3,000と決して多くはない。しかし、すでにこの時点でザンド朝はガージャール勢力にエスファハーン以北を奪われており、政治的・軍事的に発言権を増したファールスや

シーラーズの名士の動向が王位継承に大きな影響を与えたのは当然と言えよう。また、元来は商家であった彼の家系からいかなる契機で銃兵部隊の指揮官が生まれたのかについては史料は何も語らないが、同時期のヤズドで元来財務官であった人物が銃兵部隊を指揮する事例があることから、さほど特殊な現象ではなかったのかもしれない。

III. 1791年の政変

1) 経過と主体

1205/1791年夏、ロトフ・アリー・ハーン・ザンドはエスファハーン奪回のために兵を起こし、シーラーズを出発した。出発にあたってザンド族の將軍をシーラーズの市壁・城塞の守備長官に、ハーッジー・エブラーヒームをファールス総督に任命し、彼の兄弟および息子を、すべてのシーラーズや郡部の銃兵とともに同行させた（TZ 82）。ハーッジー・エブラーヒームの陰謀に関してはすでに、ロトフ・アリー・ハーンには情報が入っていたと言われ（Bridges cli）、十分に配慮した出撃であった。

ところが、冒頭に述べたように、ズール・ヒッジャ月25日／8月25日早朝、町の商人・職人や郡部の農民から銃兵を集めていたハーッジー・エブラーヒームは、弟モハンマド・ホセイン・ハーンとともに蜂起し、ザンド族の守備長官を捕らえ、市内を制圧した。同月27日／8月26日夜、兄アブドッ・ラヒーム・ハーン、弟モハンマド・アリー・ハーンが、グーメシュに布陣していたザンド軍の中で蜂起し、ロトフ・アリー・ハーンの軍勢は四散してしまった。ロトフ・アリー・ハーンは軍勢を立て直し、1週間後シーラーズ市を包囲したが、市内に残った家族を人質に取られたザンド軍は崩壊し、ロトフ・アリー・ハーンは湾岸方面へ落ちていった（TZ 84-85）。

以上のような経過を見ると、このクーデターがザンド朝下でのハーッジー・エブラーヒームとその兄弟の活動の延長上にあることは明らかである。軍事力として用いられたのは、シーラーズにおいてもザンド軍陣内でも銃兵であり、クーデター後に市壁の守備についたのもやはり銃兵であった（GG 343）。

しかし、彼らは単独でこの政変を実行したわけではない。史料 TZ によれば、1205/1790-91年のケルマーン遠征の失敗ののち、ロトフ・アリー・ハーン・ザンドは圧政に転じ、ハーッジー・エブラーヒームのその一党のみならず、他の

ファールスの役人や住民も強い反感を持つようになった。このため、彼らは皆一致団結して、反乱の機会を待ち、一部の部族をも味方につけたという (TZ 81)。ハーッジー・エブラーヒームがロトフ・アリー・ハーンを追撃するために派遣した軍の構成を見ると、彼の軍事的基盤がより明確となる (GG 348, 353, 356, TZ 88-89)。

①Dashtestān の戦

Reṣā Qolī Khān Shāhsavān	⁽²⁰⁾ 2,000-3,000の騎兵と歩兵
Sheykh Naṣr Khān Abūshehrī	⁽²¹⁾ 3,000-4,000

②Kāzerūn の戦 7,000の騎兵と歩兵

Reṣā Qolī Khān Shāhsavān, Reṣā Qolī Khān Kāzerūnī,	⁽²²⁾
Ra'īs Qāsem Kūhmarre'ī, Lotf 'Alī Khān Firūz-ābādī	⁽²³⁾

③Zarqān の戦 500のファールスの銃兵

Bāqer Khān Galle-dārī, Hādī Khān Borūjerdi	⁽²⁴⁾
--	-----------------

ブーシェフル、カーゼルーン、フィールーズ・アーバード、ガッレダール等のファールスの郡部の有力者が追撃軍の主力となっていることがわかる。もちろん、郡部の有力者のなかにはロトフ・アリー・ハーン・ザンドを支持したものもいるが、⁽²⁵⁾ハーッジー・エブラーヒームがファールスの各地の有力者をかなりの程度取り込むことに成功したことは疑いない。彼らは互いに数条からなる盟約 ('ahd va peymān) を結んでいたという (GG 350)。

また、部族出身であることが明確なのはレザー・ゴリー・ハーン・シャーサヴァーン一人であることも特徴的である。これに関連して興味深いのは政変初期にシーラーズ市内から1万から1万2千家族におよぶ部族民 (ilāt) を追放し、市内の空いた彼らの家屋にファールスの郡部の有力者達の子を住まわせたという事実である (GG 347, TZ 86)。ザンド朝はロル・レク系の部族をシーラーズ市内に移住させており、ザンド軍の主力をなしていた (FN 615)。彼らは皆、ロトフ・アリー・ハーンの忠実な支持者であったという。シーラーズ側についたレザー・ゴリー・ハーン・シャーサヴァーンの部族騎兵にしても、ダシュテスターンの戦ではザンド側に寝返ってしまった (TZ 88)。郡部の部族が続々とザンド軍に加わる史料の記述 (TZ 89, 103-104) もあわせて考えれば、ザンド側は主に部族、ハーッジー・エブラーヒームの側は主に非部族から支持を集めていたと考えられる。⁽²⁶⁾

2) 政変の目的とガージャール朝への服属

以上のように、ハーッジー・エブラーヒームは自らの兄弟が率いるシーラーズの銃兵のみならず、ファールスの郡部の非部族の有力者の支持を得て政変を敢行したのであるが、その目的はいかなるものであったのだろうか。ハーッジー・エブラーヒームは後に「私の意図は私の国を一人の王に委ねることであった。国内の混乱を終わらせるためには、それがザンドでもガージャールでも構わなかった。」と述懐しているが、すでに指摘されているように、最初からガージャール勢力に服属することを目的としていたとは考えにくい。政変直後にハーッジー・エブラーヒームと会見した Bridges は、やむを得ない状況にならない限り、彼がシーラーズをガージャール側に引き渡すことはないであろうという予想を持っていた (Bridges clxxx)。Bridges によれば、彼や郡部の有力者の政変の目的は、王を追放し自分たちで連合政権 (a federative government) を樹立し、それにケルマーンのハーンらも参加させることにあったという (Bridges cl)。それでは、この連合政権とはいかなるものであっただろうか。それ示すのが、政変に際して彼らが結んだ以下のような盟約の内容である。

- [1] 皆が互いの友好的かつ誠実な関係の強化に努めること。
- [2] 親好の心地よい葡萄酒を同盟の杯で飲むこと。
- [3] とともに心の満足から目を背けること。
- [4] いかなる権力者にもファールスのくに (olkā) へ支配の手を伸ばさせないこと。
- [5] この地方の統治の手綱をいかなる王の将軍にも与えないこと (GG 350)。

このうち [3] が若干あいまいであるが、抜け駆けして他の勢力と交渉することなどを禁じたものと解釈できる。いずれにせよ、ここで表明されているのはファールスの自治への意志であり、ザンド朝のみならず、ガージャール勢力を含めたあらゆる勢力への服従の拒否である。日本史における国一揆を連想させる。このような発想が生まれた背景には、サファヴィー朝滅亡以降のファールス地方が歩んだ苦難の歴史がある。1724年のアフガン族の占領に始まり、ナーデル・シャーへの数度の反乱、ナーデル没後の覇権争い、キャリーム・ハーン・ザンド没後の後継者争い等、18世紀のファールスは度重なる戦火に見舞われ、甚大な被害を受けた。このような経験が、王朝支配の拒否と自治への志向

につながったと考えられる。さらに、アーガー・モハンマド・ハーンがハーッジー・エブラーヒームに語った言葉として、以下のように伝えられている。

おまえ（ハーッジー・エブラーヒーム）は、彼（ロトフ・アリー・ハーン）を恐れ、以下のような方策を考えた。2人の（王位）主張者が互いに戦い、どちらか一人に事がさだまるように、朕と彼を互いに衝突させる。そして、自分は両者の間で安泰で、しっかりとシーラーズの城塞を占拠しつつ、誰も市内には入れず、自らが全権者でいよう（RS 248-249; ST 261）。

これらのことから、ハーッジー・エブラーヒームは、王朝から自立した地方権力の連合政権を目指していたと考えていいだろう。

以上のような目的を持っていたシーラーズ政権であるが、ザンド軍の激しい攻勢に、有力者が集まって協議を行った結果、ハーッジー・エブラーヒームの主張により、これまでの方針を変更し、アーガー・モハンマド・ハーン・ガージャールに救援を求める使者を送ることとなった。アーガー・モハンマドはこれに答えて、ハーッジー・エブラーヒームをファールスの総督 (beyglarbeygi) に任じ、援軍を派遣した (GG 352-353; TZ 87)。

しかし、史料 GG の説明によれば、ハーッジー・エブラーヒームは、表向きはアーガー・モハンマドに従い、ザンド朝の財宝や王族を引き渡し、税を支払いながらも、依然、他者の介入を許さず、自分一人でファールスの支配を続ける意志を持っていたという (GG 351)。実際、派遣されてきたガージャール側の最初の援軍は、当初シーラーズ入城を許されず、市外に陣を敷かざるをえなかった (GG 359; TZ 89)。さらなるザンド軍の攻勢とガージャール軍の敗北に、ハーッジー・エブラーヒームはアーガー・モハンマドのファールス親征を請い、1792年6月、アーガー・モハンマドはロトフ・アリー・ハーン・ザンドを破って、ファールスから敗走させ、シーラーズに入城した (GG 367-372; TZ 94-100; TM 207-212)。このとき、ハーッジー・エブラーヒームは再度ファールス総督に任じられ、彼の息子と兄弟2人が人質としてテヘラン滞在を命じられた。

それでも、ファールスとガージャール勢力との緊張関係は続いた。ハーッジー・エブラーヒームには、一族郎党を率いてインドに逃亡する計画すらあったという (GG 374-375)。この計画はファールスの他の名士の策略のため未然に阻止されたが、不信感を抱いたアーガー・モハンマドは、1793年5月、ファールスの名士全員をファールスの州境 Aspās まで召喚し、さらなる人質の提供とシ

ーラーズの市壁・堀の取り壊しを命じた。ガージャール側も、依然として彼らがシーラーズの堅固な市壁に拠って反乱を起こす可能性を認めていたのであろう。

市壁の取り壊しを知ったロトフ・アリー・ハーンは再度ファールスに侵入したが、再びガージャール・シーラーズ連合軍に敗れ、最終的に1794年10月ケルマーンでザンド朝は滅亡した。そして、遠征からの帰路、シーラーズに立ち寄ったアーガー・モハンマドは、ここで、ファールス総督に甥の Fath 'Alī Khān (のちのシャー) を、宰相にハーッジー・エブラーヒームを任命した。ハーッジー・エブラーヒームが権力の頂点に上り詰めた瞬間であると同時に、ファールスの自治が潰え、ガージャール政権に完全に下った瞬間でもあった。

おわりに

本稿の検討で明らかとなったのは、以下の点である。第一にハーッジー・エブラーヒームが政変を起こすことができたのは、彼が行政手腕に秀でたキャラクターであったのみならず、兄弟が指揮する銃兵という軍事力を利用できたからである。そもそも、出自が重視された当時のイラン社会において、ユダヤ教徒からの改宗者の子孫という不利な条件を持ちながら、彼がキャラクター職に就くことができたこと自体、銃兵隊長としてそれ以前から活躍していた兄弟の存在とは無関係ではあるまい。ハーッジー・エブラーヒームはこの銃兵を利用してザンド朝末期の内訌に介入し、当時国家の最高実力者にまで上り詰めていたのである。第二に、この政変にはファールスの郡部の非部族の有力者が参加しており、しかも政変当初は互いに同盟関係を結んで、王朝支配を拒否し、ファールス地方の自治を志向しようとしていたという点である。ザンド軍の攻勢に敗北を重ね、最終的にはガージャール勢力へ服従せざるを得なかったが、その過程にもガージャール政権との間に厳しい緊張関係が存在したことを確認できた。

この結果には、筆者が以前に検討したヤズドのハーン家の事例⁽²⁸⁾と多くの共通点を見いだすことができる。シーラーズはザンド朝の根拠地であったがゆえに、王朝交代期のごく短期間にしか実現しなかったが、ヤズドの事例と同様の銃兵を核とした地方権力の形成や自治への志向が見られたのである。このような現象が当時のイランにある程度起こり得たと考えてよいであろう。言い換えれば、

1791年の政変は、この時代への特徴ともいえる当時の地方権力の伸長を示す事件であったと言えるのではないだろうか。

ハーッジー・エブラーヒームは、1801年に失脚、宰相を解任されたのち、処刑され、一族も処刑・流刑されるが、彼の家系は1226/1811-2年に四男ハーッジー・ミールザー・アリー・アクバルがキャラントル職に復帰したことで新たな展開を見せる。ガージャール朝期の代表的な地方名士であるこの家系については、別稿で論じたい。

主な史料とその略号

AJ: Moḥammad Ja'far al-Ḥoseynī Khūrmūji. *Āṣār-e Ja'fari*. (Tehrān). 1276 A.H.
ET: 'Alī Qolī Mirzā E'tezād al-Saltāne. *Eksir al-tavārikh*. be-ehthemām-e Jamshīd Kiyānfār. Tehrān. 1370 Kh.

FN: Ḥājji Mirzā Ḥasan Ḥoseynī Fasā'i. *Fārsnāme-ye Nāṣeri*. do jeld. be-taṣḥīḥ va taḥṣīye az Maṣūre Rastegār Fasā'i. Tehrān. 1367Kh.

GG: Mirzā Moḥammad Šādeq Nāmī Eṣfahānī. *Tārikh-e gitiḡoshā*. bā-moqaddeme-ye Sa'īd Nafisī. Tehrān. 1363Kh.

GM: Abū al-Ḥasan Ghaffārī Kāshānī. *Golshan-e Morād*. be-ehthemām-e Gholām Reżā Ṭabāṭabāyi Majd. Tehrān. 1369Kh.

HA: Moḥammad Ja'far Khūrmūji. *Ḥaqāyeq al-akhbār-e Nāṣeri*. be-kūshesh-e Sayyed Ḥoseyn Ḥadiv Jam. Tehrān 1363Kh.

Kalāntar: Mirzā Moḥammad Kalāntar. *Rūznāme-ye Mirzā Moḥammad Kalāntar Fārs*. be-ehthemām-e 'Abbās Eqbāl. Tehrān. 1362Kh.

MS: 'Abd al-Razzāq Donbolī. *Ma'āser-e solṭāniyye*. be-ehthemām-e Gholām Ḥoseyn Šadri Afshār. Tehrān. 1351Kh.

MT: Abū al-Ḥasan b. Moḥammad Amīn Golestāne. *Mojmal al-tavārikh*. be-sa'i va ehtemām-e Modarres Rażavi. Tehrān. 2536Sh.

RS: Reżā Qolī Khān Hedāyat. *Rowzat al-ṣafā-ye Nāṣeri*. jeld-e nohom va dahom. Tehrān. 1339Kh.

ST: Moḥammad Ḥasan Khān E'temād al-Saltāne. *Šadr al-tavārikh*. be-kūshesh-e Moḥammad Moshiri. Tehrān. 1357Kh.

TJT: Nāder Mirzā. *Tārikh va joḡhrāfiyā-ye dār al-saltāne-ye Tabriz*. moqaddame, taṣḥīḥ va taḥṣīye-ye Gholām Reżā Ṭabāṭabāyi Majd. Tehrān. 1373Kh.

TM: Moḥammad Faṭḥ-ollāh b. Moḥammad Taqī Sarāvi. *Tārikh-e Moḥammadī*. be-ehthemām-e Gholām Reżā Ṭabāṭabāyi Majd. Tehrān. 1371Kh.

TZ: Ebn-e 'Abd al-Karīm al-Reżā Shīrāzi. *Tārikh-e Zandiyye*. moqaddame va

- taṣḥīḥ-e Ernst Beer. Tehrān. 1365Kh.
- ZQ: Mīrzā Fazl-ollāh Khāvarī Shirāzī. *Tārīkh-e Zū al-Qarneyn*. British Library. Or. 3527.
- Brydges: Brydges, H.J. *The Dynasty of the Kajars*. London.1833. rep. New York. 1973.
- Picot: Picot, H. “Bibliographical Notices of Members of the Royal Family, Notables, Merchants and Clergy”. F.O. 881/7028 Dec. 1887.

注

- (1) キャラントル職に関する研究状況については, M.Haneda and T.Miura, *Islamic Urban Studies*, London & New York, 1994, p.251 および, A.K.S. Lambton, “Cities iii: Administration and Social Organization” in *Encyclopaedia Iranica*, vol.5, 1990-1992, pp.610-614.
- (2) ヘラート陥落に関しては, 久保一之「16世紀初頭のヘラート」『史林』71巻1号(1988年), エスファハーン陥落に関しては, L. Lockhart, *The Fall of the Safavid Dynasty and the Afghan Occupation of Persia*, Cambridge, 1958, 参照。
- (3) 概説的なものとして, A.Amanat, “Ebrāhīm Kalāntar Šīrāzī”, *Encyclopaedia Iranica*, vol.7, 1997, pp.66-71. Mahdī Bāmdād, *Sharḥ-e ḥāl-e rejāl-e Irān*, jeld-e avval, Tehrān, 1363 Kh.s.21-28. Siyāvosh Dānesh, *Hājj Ebrāhīm Khān Kalāntar* Tehrān, 1372Kh. 彼の家系について簡単に触れているものとして, W.R.Royce, “The Shirazi Provincial Elite”, in *Modern Iran*, ed. by N.R.Keddie & M. Bonine, Albany, 1981. pp.292-296.
- (4) たとえば, Ḥoseyn Khān Neẓām al-Saltāne, *Khāṭerāt va asnād*, be-kūshesh-e Maṣūme Neẓām Māfi va gheyre, jeld-e avval, Tehrān, 1361 Kh. s.321.
- (5) この書物は, Ḥājjī Asadollāh, *Tārīkh-e Qavāmī*, Dāneshgāh-e Tehrān, Khaṭṭī, Shomāre 3013. 概当箇所は §.2.
- (6) ST18. なお, ZQ 57a は大筋で同じ記述だが, 新改宗者であることには触れていない。TJT 271 はユダヤ教からの新改宗者の子孫としているが, エスファハーン出身としている。また, FN679 では, あえて ZQ を引用したのちにこの説を否定しているが, 19世紀末におけるこの一族の隆盛が出自に関する記述に大きな影響を与えていることを示している。
- (7) たとえば, 史料 AJ のファールスの著名なヴァズィール列伝には彼の伝記はなく, FN1184 では, わずか2行触れているのみである。
- (8) 黒柳恒男訳『ハーフェズ詩集』平凡社, 1976年, 12頁。この対句の引用は ZQ 57 a, ET 55, FN679, TJT 271 など。
- (9) 同様の例として, サファヴィー朝期の著名な思想家モッラー・サドラーに関して

- も同じ対句が引用され、ハーッジー・ガヴァーモッ・ディーンの子孫とされている (*FN* 1145)。
- (10) F.Barth, *Nomads of South Persia*, Oslo, 1961, p.87.
- (11) *AJ* 15a は建設者をハーッジー・エブラーヒームの父 Ḥājji Ḥāshem とする。彼らの墓石を調査したという *HA* 309 は、マフムードをハーッジー・エブラーヒームの曾祖父とする。H.Picot は建設者をハーッジー・エブラーヒームの曾祖父 Ḥājji Moḥammad ‘Alī とし、建設年代を1718年とする (Picot 76)。建設年代は *FN* のなかでもサファヴィー朝末期 (*FN* 679), 1030/1621-2 年 (*FN* 960), 1039/1629-30年 (*FN* 1223) と諸説ある。
- (12) シーラーズの街区については、小牧昌平「シーラーズのマハッレ」『イスラムの都市性・研究報告(研究報告編)』第104号 (1991年) 参照。
- (13) 彼の職名は kadkhodā-ye Heydari-khāne (*Kalāntar* 48)。*FN* や Picot の示す職名 kadkhodā-bāshi は同時代史料にはあらわれない。彼がこの職に就いた時期は、アフガーン政権のアシュラフ期 (*FN* 680) と同ナーデル・シャー期初期 (*FN* 960) とともいう。また、史料 *ZQ* は彼は単にバーラー・ケフト街区のキャドホダーであったとする (*ZQ* 58a)。
- (14) *FN* 574, 680. なお, *AJ* 33 では両目を潰されたため、ハーッジー・エブラーヒームがその職を継いだとする。
- (15) *Kalāntar* 48. なお, *FN* 592 は彼がハーシム・ハーンのシーラーズ支配に協力したとし、殺害については全く触れていない。
- (16) これらの名家については拙稿「19世紀シーラーズの名家と地方社会」『歴史学研究』685号 (1996年) 参照。
- (17) *GG* 339. 彼の最初の職名を kadkhodā とする史料も複数存在する (*MT* 353, *MS* 72, *ZQ* 57a)。街区は当然バーラー・ケフト街区であろう。*AJ* 33 によれば、彼がヘイダリー・ハーネの長となったのは父の盲刑後 (1747年) だというのが、*FN* 680では彼の兄 Ḥājji Ṭāleb もこの職に任命されており、彼が父から直接この職を継承したかどうかは疑問である。
- (18) この事例については、拙稿「ヤズドのモハンマド・タギー・ハーンとその一族」『史学雑誌』第102編第1号 (1993年), 1-36頁参照。
- (19) このとき市内に滞在していたブリッジズによれば、ハーッジー・エブラーヒームはロトフ・アリー・ハーンの命令によるとしてこの行動を正当化したという (Bridges cxlii)。
- (20) ジャアファル・ハーン・ザンドの將軍の一人。1199/1785年と1203/1788年のエスファハーン遠征に参加 (*GM* 704, *TZ* 66)。19世紀初頭にシャーサヴァーン族がファールスとレイの間に広がっていたことは Dupré の旅行記によって確認できるが (A. Dupré, *Voyage en Perse*, Paris, 1819, tom II, p.462), 彼がファールス出身であるかどうかは不明。

- (21) この人物については、*FN* 1321; 小牧昌平「18世紀末イランの諸群雄」『上智アジア学』8(1990) p.87 注56。
- (22) 前述のカーゼルーンの有力者 Ḥājji ‘Alī Qolī Khān の兄弟、もしくは甥。先祖はキシルバーシュの一部族、Afvshār 部の出身であり、シャー・アッパース 1 世の時代以降カーゼルーンに定着したという (*FN* 1440-1442)。Amanat は彼を Qashqā’i 族の長とするが、誤りであり、部族では Mamassanī 族と密接な関係があったと考えられる (*GM* 730)。
- (23) Fīrūz-ābād 郡の徴税官 (zābet) 職を占めていた一族の出身 (*FN* 1420)。
- (24) Galle-dār 一党の長。1202/1787年、ジャアファル・ハーン・ザンドの怒りを買ひ、Shāh Cherāgh 廟へバスト (*GM* 757)。彼の一族は17世紀後半からこの郡を支配した (*FN* 1458-1459)。
- (25) たとえば, Zāl Khān Kheshti。その動機としてはカーゼルーンの勢力との敵対関係が考えられる。この一族については、*FN* 1296-1297参照。
- (26) Amanat は Qashqā’i 族ら部族の反乱への参加を強調し、19世紀後半にのハーッジー・エブラーヒームの孫 Qavām al-Molk 2 世が組織したとされる Khamse 部族連合の起源としているが、史料的根拠は全くない。Oberling が1958年に行ったインタビューでも、Qashqā’i 族の子孫は、先祖がロトフ・アリー・ハーンの強固な支持者であったことを主張している (P.Oberling, *The Qashqā’i Nomads of Fārs*, Hague, 1974, p.42)。
- (27) J.Malcolm, *Sketches of Persia*, London, 1861, p.222.
- (28) 前掲拙稿「ヤズドのモハンマド・タギー・ハーンとその一族」参照。